進行性指掌角皮の6例に就て

大和紡績株式会社広島人絹工場診療所
桑　原　亮　造

〔昭和28年9月14日受稿〕

1. 緒　　言

進行性指掌角皮症は大正13年土肥・三宅両氏により，皸裂性胼胝状湿疹より分離命名せられたる一独立疾患にして，其の後宮野・長谷川，遠山，高橋，村上，北村，向井・柴田，河辺，田林・安東，横山・鈴木，下平，大野，桜根・西来路，鈴木，岡村，浜田，森田氏等の報告あり，主として妙齢の婦人を侵し，手指の掌面にのみ限局する．一種特有の皮膚疾患にして，我が国にては日常数多く遭遇するものなりと云ふも，比較的報告少なく且つ原因に就ても不明なる点尠なからず．

余は内分泌学的に興味ある数例を経験せるを以つて之を報告し，諸賢の御教示を仰がんと欲す．

2. 症　　例

第1例　武○妙○　16才　女学生．

家族歴：父方祖父，母方祖母共に脳溢血にて死亡，両親，同胞6人何れも健，類似疾患に羅りしものなし．

既往歴：9才の時流行性耳下腺炎に羅りし外全く健康．

現病歴：昭和16年3月下旬頃より左手第1指間部，続いて右手の同部に於て掌面の皮膚が乾燥硬化し，粗糙となり次いで全指掌面に拡がり，落屑と軽度の発赤を伴ひ，所々に皸裂を生じ疼痛を訴ふるに至る．4月10日頃より初潮を見，13日より較骨療法を受け一時軽快す．其の後皸裂を生ぜず疼痛去りし為め放置し居りしも，爾来僅かの運動，体操，勤労作業等に依り月経を見，毎月3～4回斯くの如きことを繰返し居たりと，10月には多量の月経あり，約1ケ月間持続すと云ふ．

現症：体格強壮，栄養佳良，両手指掌面の皮膚は乾燥硬化し，粗糙にして軽度の発赤と落屑あり，指紋は消失す．浮腫，瘙痒なし，所々に皸裂あり，疼痛を訴ふ，全身症状として頭重，倦怠，記憶力減退ありと云ふ．

経過並に治療：脳下垂体前葉製剤「プレホルモン」及び卵巣濾胞「ホルモン」「オバホルモン」注射により約2週後には局所症状去り，月経も閉止せり，其の後17年2月及び7月の2回再発，軽度の硬化，粗糙，潮紅を認む．「オバホルモン」注射数回にして治す．尚注意深く観察するに本症を発したる時は何となく不機嫌にして動作は不活潑となり，勉強に親しまず．「ホルモン」注射により症状快方に向ふと共に明朗となり，動作亦活潑にして進んで勉強に親しむるに至る．自覚的にも爽快を覚ゆと云ふ．常に月経前に症状増悪し，月経開始と共に症状減退すと．現今尚月経開始前数日間は，指掌部皮膚の硬化の感あるも来潮と共に治すと云ふ．

第2例　高○フ○　39才

既往歴：数年来下腹痛，腰痛，子宮不定出血等あり，昭和16年2月両側卵巣全剔出術を受く．其の他特記すべき疾患なし．

現病歴：35才頃より両手指掌面の乾燥，硬化，粗糙，皸裂を来せるも較骨療法により症状軽快，其の後2一3年間放置す．卵巣剔出術半ケ年後眩暈，頭重，心悸亢進を訴ふるに至り，本症も増悪せりと云ふ．

現症：両手指掌面の皮膚は乾燥硬化し，粗糙にして，軽度の発赤あり，所々に皸裂を有し疼痛を訴ふ．

経過並に治療：卵巣「ホルモン」注射（500単位隔日）4一5回にして全身症状去り，同時に本症も快方に向ひ，「ホルモン」注射20

回にして全く健康となる．6ケ月後再発，前同様の注射を2—3回行ふも効なし．依つて1000単位のものを用ひて始めて効果現はる．6ケ月後の17年2月亦再発，2000単位の「ホルモン」注射30回及び同時に卵巣製剤の内服により治す．

第3例 谷○ミ○ 32才 女子事務員

既往歴：特記すべきものなし．

現病歴：18才発病．種々の局所療法を受けたるも治せず．「ホルモン」注射により一時治すと云ふ．月経は2—3ケ月に1回位にして量少なしと．

現症：前記症例と略々同様．

経過並に治療：「ホルモン」注射により快方に向ふ．

第4例 向 ○マ 20才

既往歴：特記すべきものなし．

現病歴：17才頃より発病，月経は6ケ月に1回位にして，本症増悪せる時は月経亦不順なりと．

現症：略々前例と同様．

経過並に治療：18才頃より「ホルモン」注射を始め，漸増的に約半ケ年注射し．19才まで継続，月経も時々ある様になり，最近は2ケ月に1回位となり，同時に本症も全治し再発せず．

第5例 熊○イ○ 52才

既往歴：特記すべきものなし．

現病歴：約10年前月経開止後発病，種々の治療を受けたるも効なく，局所療法にて一時多少軽快するも全治せずと云ふ．

現症：略々前例と同様．

経過並に治療：卵巣製剤投与，約1ケ月にして全治．4ケ月後の17年11月終り頃より再発，12月には再び以前の如き状態となり卵巣製剤により治す．

第6例 大○ミ○ 22才

既往歴：特記すべきものなし．

現病歴：19才頃より指掌の乾燥，硬化，粗糙，落屑を生じ，卵巣製剤の注射を受けたるも無効なりと云ふ．

現症：手指に於ける症状は略々同様，甲状腺軽度に腫脹せるを認む．

経過並に治療：沃度加里微量投与に依り全治，3—4ケ月後再発再び沃度加里投与により全治す．

3. 総括並に考按

前記の如く進行性指掌角皮症の自家症例は6例なり．之を次の各項に就き文献と対照しつゝ総括的に比較考按せんとす．

1 性別

余の症例の性別は全部女性なり．宮野・長谷川，遠山，村上，北村，向井・柴田，河辺，田林，安東，下平，伊藤，山本氏等の症例亦悉く女性にして，始め女性に限れる疾患なりと云はれたるも，其の後横山・鈴木，桜根両氏，鈴木，浜田，竹下，森田氏等により男子症例報告せられ，稀に男子にもあること知られたり．

2．発病年齢

第1例は15才来潮前に．第3，4，6例は20才前の月経来潮後に第2例は35才に，第5例は経閉期の発病なり，20才前後の月経来潮後の婦人に多きことは，村上，北村，向井・柴田，河辺，伊藤，山本，鈴木氏等の報告にて明らかにして，余の症例にても第3，4，6例の如く之に属するもの多し．

而して第2例の如き高年者にも稀に見らるることあるは村上，伊藤，鈴木氏等の症例に見るところなり．北村氏は月経初潮後1,2年に発病し，初潮前に発病せるもの1例もなしと云ひたるも．第1例の如く初潮前に発病することあるは下平，鈴木氏等の報告にも之を見る．又第5例の如く経閉期にも発病することあるは村上，伊藤，鈴木氏等の例に見る所なり．

3．症 状

全身症状に就ては従来諸家の報告には触るゝ所なきが如し．然るに第1例に於ては頭重倦怠．記憶力減退，不機嫌等を認め，而も本症とその消長を共にし．他に何等認むべき原因なき点より之等の全身症状は本症に基因するものなるべし．

局所症状．通常最も多く使用し，外来の刺戟を受くる手指即ち右中指，示指及び拇指の末節指掌面に始まり，次第に他指及び手掌に向ひ進行的に皮膚面は乾燥，硬化し，粗糙となり，少量の微細なる落屑を形成す．皮膚の紋理は不明瞭となり，又は全く消失す．処々に皸裂を生じ．疼痛を訴ふるに至る．緊張感あり光沢を有す．瘙痒は缺如す．病勢の進行は比較的緩慢にして一進一退．数年にして左右両側手指掌に至つて停止し，之より更に進行することなし．従つて前膊及び手指背部を侵すことなし，初発は四季何れの季節にも発生すると雖も冬季に増悪するもの多しと云ふ．余の症例に於ても略々之れ等の記載一致す．

4．類症鑑別

手掌湿疹，汗疱，汗疱状白癬，手掌足蹠角化症，毛紅性紅色粃糠疹，乾癬，微毒性手掌鱗屑疹，砒素角化症，等と鑑別するを要するも，初発年齢及び性別の特殊なる．初発及び罹患部位の限定，瘙痒の缺如及び臨牀的特徴により之等と鑑別せり．

5．原　因

本症の原因に就ては宮野・長谷川両氏は先づ婦人生殖器機能障碍に因るに非らずやとし，卵巣製剤を用ひてその効果を認め，其の後遠山，村上，北村，河辺，鈴木等は本症患者に婦人科的疾患或は月経異常を認め，女性生殖器機能障碍との関係に就て報告せり，余の症例に於ても多数例に月経異常を認め，第2例に於ては卵巣嚢腫を有し之に伴ひて本症を発病し，之が増悪に従ひ本症も亦増悪し，第5例は経閉期に発病し，第1例は来潮前に本症の増悪を認め，6例中5例まで卵巣「ホルモン」にて治癒せしめ得たる等本症と生殖器機能障碍との間に密接なる関係あるを思はしむ．

本症と甲状腺との関係に就て，村上氏は甲状腺肥大を有した本症患者5例に就て基礎代謝を測定し，大体甲状腺機能亢進あるのを実験し，河辺氏は本症50例中15例に軽度の甲状腺肥大を認め，且つ甲状腺機能亢進ある現象（基礎代謝亢進，呼吸停止係数増加，血液像の特性）を挙げて甲状腺機能亢進は本症の主因なるべしと云ひ，鈴木氏も「バセドウ氏病」の発現と同時に本症を惹起せし例，及び本症に甲状腺腫を有するを認め，甲状腺剤にて殆んど治癒せるも，中止により再発せる例を報告せり．然し之に対し北村氏は3例に就て基礎代謝を測定し，正常値を得，又沃度加里も無効なりし点より本症と甲状腺機能との関係に就ては之を否定せり．

余も亦1例の本症に甲状腺腫を有するを認め，沃度加里微量投与により治癒せしめ得たり．即ち本症と甲状腺との関係も考慮を要する原因的一因子なるべし．

内分泌腺は植物神経によりて司配調節せられ，又その分泌物は植物神経の緊張に或る影響を与ふるものなり．北村氏は60％は「アドレナリン」過敏にして即ち交感神経の一般に亢進状態にあるもの多きを認め，村上氏は「アドレナリン」に過敏なるもの多しと云ひ，河辺氏は本症の大部分に植物神経系機能の異常を認め，その状態は卵巣機能減退の場合にみられるものとよく一致し，又同時に甲状腺機能亢進の際にみる状態とも類似すると云ふ．

以上の諸点より，本症の原因は女性生殖腺又は甲状腺の内分泌異常が主要なる因子として働き，之れに外的刺戟其の他何等かの誘因が加はりて発病するものならん．

6．既往症に就て

自家症例中第1例は流行性耳下腺炎の既往症を有し，其の他の例にては認むべきものなく．詳細不明なり．既往症と本症との関係に就ては河辺氏が脚気に罹患したるもの比較的多きことを注意せる他文献に接せず．

第1例に於ける流行性耳下腺炎の既往症に就き考察するに，流行性耳下腺炎と生殖腺との関係に就ては文献尠なからず，流行性耳下腺炎の際に睾丸炎の合併することは古来知られたる所なるが，卵巣炎の合併に就ては Jnhelder, Berger の報告例あるも稀なるものとせらる．小沢博士は睾丸炎及び副睾丸炎は固有なる併発症にして26～30％に見．経過後

睾丸の萎縮するもの尠なからず．婦人にありては亦時に卵巣炎を起すも，男子の睾丸炎に比して稀なり．更に稀に乳腺炎を見ることあり．亦，涙腺．甲状腺，胸腺の腫脹を見ることありと云ふ．之一ツは卵巣炎は睾丸炎に比し診断困難に因るに非らざるか．内分泌学の泰斗 Van den Verden は「生殖腺と耳下腺との関係は昔から知られていることで，女で生殖器の疾患又はそれの手術をやつた後で耳下腺に変化を来すことがある．原因は分らぬが之を説明するには耳下腺が腫れるとか，唾液が違つて来るとか兎に角も少し臨牀的に観察する必要がある．耳下腺製剤を卵巣疾患に用ひて居る人もある位で未だ証明は無いが注目すべきことである」と云へり．

之等の点より考ふれば，第1例に於ける流行性耳下腺炎の既往症は生殖腺，時に甲状腺を通して間接に進行性指掌角皮症の発症に関係を有せしに非らざるや，記して今後の研究を俟たん．

7．治 療

本症の予後は可良にして単なる軟膏療法のみにても著しく軽快乃至治癒する場合少なからずと云ふ．

先づ炊事仕事を避けるは治療法としても亦予防法としても必要にして，以下本症に応用せられる各種療法を記載すれば次の如し．

局所療法

（イ） 紫外線照射，「レントゲン」照射等の理学的療法．

（ロ） 「ビツク」氏軟膏，硼酸軟膏，硼酸亜鉛華軟膏等の軟膏療法．

（ハ） 卵胞「ホルモン」塗擦療法．

（ニ） 「ヒスタミン」軟膏塗擦療法．

全身療法

（イ） 卵巣「ホルモン」製剤，「オオホルミン」「オハホルモン」「ルテイノール」及び脳下垂体前葉「ホルモン」たる「プベローゲン」，「プレホルモン」，「ヒポホリン」

（ロ） 脳下垂体「レントゲン」照射．

（ニ） 「ビタミン」B．

（ホ） 「エプシン」．

（ヘ） 「ナルベリジン」「フイブロリジン」照射．

（ト） 甲状腺製剤．

宮野・長谷川両氏が「オオホルミン」「ルテイノール」の使用成績を報告して以来卵巣製剤の応用普く行はれ，遠山，村上，北村，大野氏等は相当の成績を挙げ居るも，一方高橋，向井・柴田，宗氏等は卵巣製剤の著効を認めず．其の後諸家の報告は何れも著効を認める場合と反対に無効に終る場合あるを報ず．余の症例にては甲状腺腫を認めたる例のみ無効にて他は悉く著効を認めたり．田林・安東氏により脳下垂体前葉「ホルモン」（「プベローゲン」）の効果を賞揚せられてより．下平，北村氏等之に賛せり．河辺氏は沃度加里の微量投与により全治率46％の良結果を收め，余も亦「ホルモン」剤の無効なりし甲状腺腫を有する1例に於て本療法により全治せしむることを得たり．和田氏は卵胞「ホルモン」塗擦療法（「オストログランドール」軟膏を1日1回1000単位宛15000～20000単位使用）．横山教授並に河合氏は「ヒスタミン」軟膏塗療法（0.2％塩酸「ヒスタミン・ラノリン」を毎日1回患部に塗擦）．北村，高原両氏の「ビタミン」B療法等の報告あり．

余の症例に於ては5例は「ホルモン」剤により，1例は沃度加里微量投与により治癒せしめ得たるも，再発し易きことと再発の際には「ホルモン」剤は増量を必要とする傾あるが如し．

8．本症は邦人にのみ特有なるものなりや

北村氏は欧米の文献を探づぬるに未だ報告例全くなく，本疾患は本邦特有のものか又は在来の胼胝状湿疹と混同して欧米諸家の特別の注意を引かざるに帰因するものなるかと云ひ，鈴木氏は欧米では未だ漠然と湿疹中に包含せるものと推測し，Sequeria, R. Barthélemy (1928). J. Sellei (1932) 等の類似の症状の記載あるを認め将来欧米にても亦本症の報告あるを信ずると結論せり．

4. 概　　括

1. 所謂進行性指掌角皮症（土肥・三宅）の6症例に於て5例は卵巣製剤及び脳下垂体前葉製剤により，1例は沃度加里微量投与により治癒せしめ得たり.

2. 本症の既往症として流行性耳下腺炎を有するもの1例あり.

3. 本症の全身症状として軽度の頭重，倦怠，記憶力減退，不機嫌等を伴ふことあり.

4. 本症の原因に就いて，女性生殖腺又は甲状腺の内分泌異常が主要なる因子として働き，之に何等かの誘因が加はりて発病するものの如し.

擱筆するに臨み御校閲の労を辱ふせし恩師田部教授に深甚なる感謝の意を表し，併せて友人下田博士の御授助を深謝す.

主　要　文　献

1) 伊藤　実：泌尿誌. 35巻，1号，18頁，昭和9年1月.
2) 岡村龍彦：泌尿誌. 47巻，2号，143頁，昭和15年2月.
3) 大野慶文：岡医雑. 45巻，11号，2811頁，昭和8年11月.
4) 小沢修造：入沢内科学. 第1巻，332頁，昭和8年7月.
5) 河辺昌一：泌尿誌. 30巻，4号，380頁，昭和5年4月.
6) 河辺昌一：泌尿誌. 30巻，5号，498頁，昭和5年5月.
7) 河辺昌一：泌尿誌. 34巻，6号，575頁，昭和8年12月.
8) 北村精一：泌尿誌. 29巻，10号，975頁，昭和4年10月.
9) 北村精一：泌尿誌. 34巻，5号，517頁，昭和8年11月.
10) 宮野英利，長谷川宗寛：泌尿誌. 25巻，1号，77頁，大正14年1月.
11) 西来路征夫：泌尿誌. 36巻，3号，381頁，昭和9年9月.
12) 下平　尚：医事公論. 975号，4頁，昭和6年3月.
13) 鈴木三郎：皮膚と泌尿. 3巻，6号，635頁，昭和10年12月.
14) 田林綱太，安東康士：泌尿誌. 31巻，5号，788頁，昭和6年5月.
15) 高橋幸三：泌尿誌. 28巻，8号，844頁，昭和3年8月.
16) 土肥慶蔵：土肥皮膚科学. 中巻，11版，236頁，大正13年8月.
17) 遠山郁三：内外治療. 2巻，11号，1333頁，昭和2年11月.
18) 浜田長徳：泌尿誌. 48巻，1号，62頁，昭和15年7月.
19) 村上立男：岡医雑. 40巻，10号，2177頁，昭和3年10月.
20) 村上立男：岡医雑. 42巻，6号，1474頁，昭和5年6月.
21) 村上立男：泌尿誌. 28巻，10号，1045頁，昭和3年10月.
22) 村上立男：泌尿誌. 30巻，8号，872頁，昭和5年8月.
23) 向井利一，紫田昇治：皮膚科記要. 14巻，6号，653頁，昭和4年12月.
24) 森田愛之：岡医雑. 53巻，7号，1507頁，昭和16年7月.
25) 山本欽三郎：泌尿誌. 36巻，6号，723頁，昭和9年12月.
26) 横山　浩，鈴木三郎：泌尿誌. 32巻，9号，868頁，昭和7年9月.
27) 横山　浩：日本医事新報. 1008号，5頁，昭和17年1月.